

平成 21 年 4 月 10 日現在

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2006～2009

課題番号：18390603

研究課題名 (和文) 在宅虚弱高齢者のスクリーニング方法と看護職による予防訪問プログラムの開発と評価

研究課題名 (英文) Development and evaluation of preventive home visit program and screening system for frail elders living at home

研究代表者

河野あゆみ (Ayumi Kono)

大阪市立大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：003103255

研究分野：看護学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：介護予防、虚弱高齢者、在宅看護、スクリーニング、地域看護、予防訪問

1. 研究計画の概要

本研究は予防支援が必要な在宅虚弱高齢者のスクリーニング方法を検討し、予防訪問プログラムの開発と評価を行うことを目的としている。

1) スクリーニング方法の検討

①介護認定をうけていない独居高齢者を対象にある地域で悉皆調査を実施し、介護予防事業対象者把握における基本チェックリストと地域看護職の判断との内容を比較する。

②要支援と認定された在宅虚弱高齢者のうち、介護保険サービス利用者と未利用者の身体・心理・社会的特徴を検討する。

2) 予防訪問プログラムの開発と評価

在宅虚弱高齢者のための予防訪問プログラムを開発し、無作為化比較試験により、予防訪問プログラムについて、高齢者の身体心理社会的側面から評価を行う。

2. 研究の進捗状況

1) スクリーニング方法の検討

①介護予防事業対象者把握における基本チェックリストと地域看護職の判断

平成 18 年度に介護認定を受けていない A 町全独居高齢者 677 人に郵送調査を行い、返送のあった 501 人のうち、非独居者、交通機関を使って外出が可能な者を除外した 110 人に対して看護職による訪問面接を

実施した。その結果、予防支援が必要な高齢者は看護職の判断による者は 33 人 (40.7%)、基本チェックリストによる者は 12 人 (15.2%) であり、両者のカッパ係数は 0.17 であり、その一致率は低かった。

以上より、予防支援が必要な対象者を把握する際に、基本チェックリストでは対象者を見逃す可能性が示され、看護職等の判断が重要であることが明らかになった。

②介護保険サービス未利用の要支援高齢者の特性

平成 19 年度には、B 市の全要支援高齢者 527 人のうち、過去 3 か月間継続してサービスを利用している者 293 人、サービス未利用者 187 人を対象として、身体心理社会的特性について、郵送調査を実施した。その結果、サービス利用者は、未利用者に比べて、独居高齢者が多く ($p=0.0006$)、交通機関を使って外出する者が少なかった ($p=0.044$)。また、サービス未利用者は「介護保険サービスを受けたいと思い、介護認定を受けた者」が 47.4% 占めていた。

以上より、サービスを利用している要支援者は、その社会関係が希薄になりやすい特徴があると考えられた一方、サービス未利用者の約半数は申請時にはサービスを受けたいと考えていたことが示され、現行の介護保険サービスでは対象者のニーズに合っていない可能性が示された。

2) 予防訪問プログラムの開発と評価

既存の文献と数例の事例から予防訪問プログラムを作成し、それに基づき、予防訪問を2年間提供し、身体心理社会的効果について評価を行う予定である。

調査地域は大阪府下A町(人口18861人)、B市(同66092人)、C市(同78560人)である。これらの地域に住む介護保険サービスを過去3か月間利用していない要支援高齢者323人(女性73.4%、平均79.9才SD6.5)を対象に訪問群を161人、対照群を162人として、無作為に割り付けを行った。平成19年度から、訪問群の高齢者に対しては、地域包括支援センターの看護職等により、原則として6か月に1回、予防訪問プログラムを実施している。なお、対照群の高齢者に対しては、各市町村における通常の高齢者・在宅ケアを提供している。

平成20年度は、介入1年後の高齢者の身体心理社会的効果の評価するために対象者323人に郵送調査を実施した。平成21年度も引き続き、予防訪問を提供し、2年後の効果の評価を行う予定である。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)当初の予定どおり、ほぼ順調に研究が進行してきている。調査地である市町村および保健センターや地域包括支援センター等とも連携を十分に図っており、予防訪問の実施状況も順調である。

4. 今後の研究の推進方策

今後、当初の計画どおり、引き続き、研究を推進する予定である。また、本研究結果から示された結果をもとに、地域看護実践への還元方法を検討したいと考える。

5. 代表的な研究成果

[雑誌論文](計9件)

- ①河野あゆみ,藤田俱子,津村智恵子,他. 訪問看護利用者2事例に対する療養通所介護の試み.日本在宅ケア学会誌. 2009;12(2):52-59.(査読有)
- ②板東彩,河野あゆみ,津村智恵子. 独居虚弱高齢者の身体的機能、心理社会的機能、生活行動における性差の比較.日本地域看護学会誌. 2008;11(1):93-99. (査読有)
- ③河野あゆみ,板東彩,津村智恵子,他.

独居虚弱高齢者における介護予防事業対象者把握の検討.日本公衛誌. 2008; 55(2): 83-92. (査読有)

④板東彩,河野あゆみ,中村裕美子,他. 地域虚弱高齢者のための認知症予防ケアプログラムの試みと評価.日本地域看護学会誌. 2007; 9(2): 87-92. (査読有)

[学会発表](計31件)

①Kono A, Fujita T, Tsumura C, et al. Is there any difference between communities? ; Characteristics of elders certificated in the two lowest LTCI care levels.12th EAFONS. 2009/03/14-15.

②Kono A, Fujita T, Tsumura C, et al. A preventive home visit program targeted to specific care-needs of ambulatory frail elders. 61th GSA. 2008/11/21-25.

③河野あゆみ,藤田俱子,津村智恵子.在宅要支援高齢者における介護保険サービス利用の有無に影響している因子.第28回日本看護科学学会.2008/12/13-14.

④Fujita T, Kono A, Tsumura C. The care assessment among elderly people aged 75 or over without care certification of the LTCI. 1st Korea-Japan Joint Conference Community Health Nursing. 2007/11/23.

⑤Kono A, Fujita T, Tsumura C, et al. Cognitive response changes during adult day nursing care service for severe disabled elder with skilled nursing care needs. IPA. 2007/10/14-18.

[図書](計4件)

①河野あゆみ(共著). 閉じこもり.老年症候群別看護ケア関連図&ケアプロトコル.金川克子監修.中央法規出版, 2008:278-295.

②藤田俱子(共著). 高齢者虐待(施設・病院など).老年症候群別看護ケア関連図&ケアプロトコル.金川克子監修.中央法規出版, 2008:352-367.

③河野あゆみ(共著).在宅ケアシステムづくり.地域看護学.津村智恵子編.中央法規出版,2008:167-174.

④河野あゆみ(共著). 閉じこもりの評価.高齢者への包括的アプローチとリハビリテーション.大内尉義監修.メジカルビュー社,2006:121-127.